

2021 年度 教育 研究 活動 報告 用 紙 (様式 9)

氏名 前田 幸	職名 講師	学位 助産修士 (専門職) 天使大学 2006 年
---------	-------	---------------------------

研 究 分 野	研究内容のキーワード
助産学、母性看護学	助産ケア、助産師外来、バースレビュー、出産想起、分娩の振り返り、助産学生、分娩介助、乳がん検診

研 究 課 題
・分娩体験におけるバースレビューの意義や役割について考察する ・妊娠期からの胎児へのコミュニケーションが愛着に与える影響について考察する ・助産学生の分娩介助の習得過程に関して考察する ・乳がん検診・自己触診法の啓発活動を通しての学生の学びについて考察する

担 当 授 業 科 目
【助産別科】 ・助産診断・ケア学Ⅰ 妊娠期 (前期) ・助産診断・ケア学Ⅴ 周産期のハイリスク (前期) ・助産診断・ケア学Ⅶ 助産過程演習 (通年) ・助産学研究演習 (通年) ・実習：助産学基礎実習 (前期) 助産学実習Ⅰ・助産学実習Ⅱ・助産管理実習 (後期) 【看護学科】 ・母性看護方法論 (2 年後期) ・母性看護学演習 (3 年前期) ・母性看護学実習 (3 年後期～4 年前期) ・助産診断・ケア学Ⅱ 分娩期 (前期) ・助産診断・ケア学Ⅵ 健康教育演習 (通年) ・女性の健康支援 (前期) ・母子の心理・社会学 (前期) ・ウイメンズヘルス (3 年前期)

授業を行う上で工夫した事項 (※ 助手については、実習・演習等の指導を行う上で工夫した事項)
2021 年度は、新型コロナウイルス感染症の影響により、遠隔授業と対面授業を併用したハイブリット型の授業形態となっている。 授業科目名【助産診断・ケア学Ⅰ・Ⅱ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ】 助産診断・ケア学では、基礎的知識及びフィジカルアセスメント、助産技術の習得ができるように、事前課題やワークシートなどを用い、学生自身が主体的に自ら考え、意欲・関心が得られるように工夫した。できるだけ、双方向型の授業を意識し、ディスカッションや発表を取り入れるなど、教員と学生同士の学びの共有ができる授業を心掛けた。演習においては、最新のガイドラインなどを活用し、机上の学習で得た知識を統合させ、ケアの実践につながるよう、担当教員とともに環境を整えた。また、実際に臨床の場において体験する場面やケアなどを積極的に取り入れていった。 1. 助産診断・ケア学Ⅰ (妊娠期) では、母性看護学で培ってきた知識をより深く掘り下げ定着させるために、ワークシートを用い、個人ワークとグループワークを併用しながら知識習得のための授業を目指した。特に、妊娠期における保健指導の必要性やその根拠について理解し、対象者にとって必要な指導を導き出せるように意識しながら関わった。演習に関しては、演習内容を事前に提示し、自己学習を行った上で臨むようにした。実習において、必須である妊婦健診や保健指導に伴う技術に関しては、より具体的にイメージができるよう基本技術に加え、演習内容に妊婦と助産師役、第三者の視点も含めロールプレイを行い、ケアに結び付けられるよう演習を組み立て取り組んだ。演習後は、観察したことをアセスメントするとともに、経験したことに対する振り返りの機会をもった。また、模擬妊婦体験を通して、日常生活を妊婦として体験する機会もち、その経験を共有しケアへ結びつけることができるように工夫した。

2. 助産診断・ケア学Ⅱ（分娩期）では、事前課題を課して母性看護学で得た知識を復習するとともに、助産の専門的知識の習得に結びつけることができるよう準備をした。分娩期の生理・分娩経過に伴う産婦や胎児の変化、支援方法について学生自身が自ら考え、意欲・関心を持てるように DVD 視聴や模型を使用し、授業を実施した。また、知識の定着を確認できるように小テストを行い、結果をすぐにフィードバックし復習へつなげることができるように工夫した。演習に関しては、演習内容を事前に提示し、自己学習を行ったうえで臨むようにした。産婦人科ガイドラインや助産業務ガイドラインを中心に臨床での基準に沿って、また科学的根拠を持って、技術を実践できるよう意識づけを行った。実習において必須である分娩介助やそれに伴う技術に関しては、より具体的にイメージができるよう基本技術に加え、事例を用いての演習を組み立てて取り組んだ。また、学生が胎盤の模型を各自作成し、使用することで主体性を促した。分娩経過に沿って、経過診断と時期診断が行えるように、実際にパルトグラムの記載を行いながら、情報収集・アセスメント・ケアの方向性を常に修正し、分娩のケアの演習を行った。記録の重要性にも触れ、助産録など責任をもって記載することを実施した。感染対策についても学生自身がより意識して行動できるように工夫した。

3. 助産診断・ケア学Ⅵ（健康教育演習）では、妊娠期を担当した。助産診断・ケア学Ⅰ（妊娠期）と連動しながら、保健指導の指導案の作成をおこなった。担当教員とともに、きめ細やかな指導を心掛けた。

授業科目名【助産学基礎実習】

新型コロナウイルス感染症拡大状況に合わせて、学内実習と臨地実習のハイブリット形式で実習を実施した。学内実習では、実習目標の到達にそって、臨床での実習と同レベルでの経験ができるように担当教員と共に、準備を行い取り組んだ。基礎助産学実習では、基本的な助産技術の習得および助産過程の展開ができるように学生の支援を行った。具体的には、対象者を捉えることからはじめ、母子の安全を考え、また科学的根拠に基づいたケアを学生が提供できるように各妊娠期・分娩期・産褥期・新生児期の事例を用い実習を実施した。また、より臨地実習に近づけるため、小チーム制を取り入れ、それぞれのチームを担当教員が受け持った。実習計画発表・報告、申し送りなども経験できるよう工夫を行うと共に、時間を意識しながら実習を行った。学生個々の価値観等を考えながら支援するとともに、助産ケアに関して、フィジカルアセスメントをしたうえで、今後どのようなことが予測されるか、対象者に必要なケアは何か、学習で得た知識を活用できるようにフィードバックを行い工夫した。全体で実習のまとめを行うことで、この実習での経験が次の段階へつながるようにした。

授業科目名【助産学実習Ⅰ・Ⅱ・管理】

新型コロナウイルス感染症拡大状況に合わせて、学内実習と臨地実習のハイブリット形式で実習を実施した。すべての学生が、臨地実習を経験できるよう教員間で話し合い、実習を組み立てた。実習目標の到達に沿って、助産技術の習得および助産過程の展開ができるよう学生の支援を行った。

特に助産学実習Ⅰ・Ⅱでは学生が対象者や家族を多角的に捉え、気付き、対象者に寄り添ったケアを提供できるように意識して、学内実習では事例を用い実習を実施した。その際に、臨地実習で学生が経験したことを共有する機会をもつなどの工夫を行った。

助産学実習Ⅰ（正常）では、正常経過と逸脱経過の判断を行いながら、倫理的視点を常に持ち、ケアを実施できるよう助言等の工夫をした。臨地実習では、臨床指導者や他の教員と連携をとり、意見交換しながら支援するとともに、学生がより対象者の個別性を考えたケアを実施できるように工夫して、フィードバックを行った。また、正常からの逸脱の事例を経験した学生には、1つ1つの場面やケアの振り返りを行う機会を持つとともに、グループ間での情報共有やディスカッションを通し、より客観的に学びを共有することができるよう支援した。

助産学実習Ⅱ（正常逸脱）では、逸脱の経過やハイリスク疾患の学習をしっかりと行い、対象の理解へつなげるとともに、必要な保健指導を考え実施した。また NICU での実習では、施設間での実習に差があったものの、NICU での実習を通して、レポートを課すことで共通の理解ができるように工夫した。

授業科目名【母性看護方法論】

2021 度は、産褥期・新生児期を担当した。母性看護は、対象が女性や子どもと家族であるため、学生が自分自身の身体と結びつけることができるよう、日常生活での関連性を示すとともに、体操など学生が机上でも体験できる方法も取り入れた。学生が主体的に学習できるように、事前に講義資料を提示するとともに、予習範囲を提示した上で講義をすすめた。講義の中でワークシートを用いた学習や小テストなどを取り入れ、学生自身が知識の習得状況を確認できる機会を設けた。母性看護学をより具体的にイメージでき、また興味を持てるよう写真や動画などの映像を取り入れるなどの工夫をした。また、学生が教科書の知識と結び付けてイメージし

やすいよう臨床の現場で起こりうることや自身が経験したこと、実習で先輩たちが経験したことなど具体的な事例等を用いて、看護者としての考え方や対象者との関わり方を考える機会をもてるよう工夫した。また、時事的トピックも加えることで、学生が日常生活中で母性看護を身近に意識できるよう意識した。
授業科目名【母性看護学演習・実習】 母性看護学演習では、看護過程の習得ができるように、ワーク型の演習を取り入れ、小グループ単位で担当教員がサポートし、個別的で細やかな指導を実施した。また、看護技術に関しては、感染対策を行った上で、技術演習を行った。例年に比べ技術に要する時間が少なかったため、動画視聴などを通して学生が繰り返し技術を学べるように教材を工夫した。また、技術習得の不足部分に関しては、母性看護学実習の中にフォローを行った。 母性看護学実習に関しては、新型コロナウイルス感染症拡大の状況により、臨地実習・学内実習を併用して実施した。臨地実習では、実習指導者と相談しながら、学生が学びを深めることができるよう感染対策を行いながら、見学やケアの実施の機会が得られるように工夫した。 学内実習では、事例を用いて看護展開することにより、臨床での実習に近い形で実習ができるよう環境を整えた。同じ時期に学内実習をしている助産学生の行う保健指導やMC、分娩介助を見学する機会を設けるなど工夫した。また、学生自身が妊婦・産婦・褥婦を体験することで、対象者の状況や気持ちを考える機会を設けた。ケアの振り返りやカンファレンスを多く取り入れ、学生自身の気づき、学生同士の気づきを大切にし、ケアをより深く考えることができるように工夫した。また、看護技術の習得が十分ではない部分に関しては、繰り返し実施をすることで技術の定着を図った。臨地実習・学内実習とも実習を行う中で、主体的に学生がカンファレンスを行うテーマを決め、実習の総括として、まとめカンファレンスとともにテーマカンファレンスを実施した。

学 会 に お け る 活 動		
所属学会等の名称	役職名等（任期）	加入時期
日本看護協会 日本助産学会 母性衛生学会		2003年4月～現在に至る 2017年3月～現在に至る 2018年4月～現在に至る

2021年度 研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書、学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概 要
(著書)				
(学術論文)				
(翻訳)				
(学会発表)				

外部資金（科学研究費補助金等）導入状況（本学共同研究費を含む）			
（１） 共 同 研 究			
研 究 題 目	交付団体	研 究 者 ○代表者（ ）内は学外者	交付決定額 (単位：円)

外部資金（科学研究費補助金等）導入状況（本学共同研究費を含む）			
（２） 個 人 研 究			
研 究 題 目	交付団体	交付決定額 (単位：円)	備 考

社 会 に お け る 活 動 等		
団体・委員会等の名称 (内 容)	役 職 名 等	任 期 期 間 等

学 内 に お け る 活 動 等 （役職、委員、学生支援など）
教務委員（2019年～現在に至る） 助産別科 教務全般担当 助産師国家試験対策担当 家族計画実施指導員資格認定担当 アドバイザー担当